

## 中国パイ族の移住伝説と族譜

余志清(清泉女子大学人文科学研究所客員所員)

「祖先移住伝承」(「祖先同郷伝説」)は、中国各地の漢族の間に広く見られる伝承で、自分たちの祖先がかつどの場所から移住してきたかを述べたものである。代表的なのは、広東省の中部の本地人、広東人のあいだに広まっている、その祖先が南宋末に南雄の珠幾巷から移住して来たという伝説などである。

牧野巽は、その「祖先同郷伝説」は華南少数民族の人々の間にも広く見られ、しかも漢族の祖先伝承と少数民族のそれとは内容的に、構造的によく似通ったものが見られると指摘している。その例として、雲南省の白族の南京伝説、貴州、広西などの苗族の江西伝説、瑶(ヤオ)族の南京伝説、江西伝説、そして広西の壮(チワン)族の山東省青州伝説などを挙げている(牧野 1985)。

中国貴州省貴陽市周辺に居住しているパイ族の間に、自分の祖先が「江西省吉安府朱市巷から来た」という「祖先移住伝説」が広く伝わっている。また、朱市巷伝説に込められた「漢族の子孫」という主張が、様々なかたちで族譜に登場している。多くのパイ族の族譜にも、祖先が江西省から来た漢族であると記されており、さらにパイ族を含めた「非漢民族」を鎮圧するために貴州省へやってきた「征夷大將軍」であるという記載もある。

一方では、人が死んだら、自民族の祖先のいるところへ帰るといった観念は移動の歴史をもつ西南中国の多くの少数民族にみられるものである。この地域のパイ族の葬送儀礼(とくに「超度儀礼」)においてもこうした観念が凝縮して現れている。パイ族は死後、祖先界へ帰り、そこで歴代の祖先たちと団欒し、ともに暮らすという他界観を非常に重要に考えている。普段悪いことをしたら、祖先界へ帰れなくなる、祖先へ会えなくなるなど、この他界観はいまなお彼等の祖先観念の重要な一部分であり、彼等の幸福観でもあるといえる。

この祖先のいるところ、つまり「祖先界」は、江西省ではなく、自民族の発祥地である。パイ族の源流に関しては、歴史文献や人類学の資料からみると、古代「百越」の一支派「駱越」から由来する説が有力であると考えられる。葬送儀礼では「引魂幡」に各祖先の発祥地が書いてあるが、それらは朱市巷ではない。「蘭故州」、「長州」のような祖先の古い居住地の地名である。「蘭故州」と「長州」は実名であったと考えられるが、どこにあるのかについてはいまだに解明されていないが、貴州省内の地名である可能性も考えられる。「超度儀礼」において、死者を無事に「祖先界」に帰らせるために、さまざまな装置が用意されている。「祖先がパイ族である」ということも、多くの場面で強調されている。

明清以降、パイ族が漢族の族譜を受容し、族譜において自分の祖先が江西省から来た漢族であると明記し、自分の正統的な「漢族出身」を主張しようとしていた。これは、漢族が政治的・経済的に優位を占める状況におかれたパイ族が選んだ一種の生存戦略ともいえよう。族譜の受容は、中国の競争社会に勝ち抜き、安定と上昇を獲得するための一手段として機能したという重要な意味を持っていたのである。パイ族は、外部へ向けて、自ら漢族と主張し、漢族にしか与えられなかった教育・科挙受験などの機会を得ようとしていた。

しかし、自民族内部において、自分の祖先がパイ族であるという認識を変えることはなかった。むしろ、パイ族は自分の(パイ族である)祖先を尊重し、葬送儀礼などの伝統を堅持することによって、固有の祖先観念を保ってきたといえる。パイ族が現代社会においても、漢族との関係が、常に変動を蒙り、再編されている。そしてパイ族はその変動に適応する模索はいまなお続いているといえよう。

本発表は、移住伝説、族譜また葬送儀礼の細部から、パイ族の重層的な祖先観念とその発生背景について考察し、その意味について検討していく。

### 【参考文献】

- 牧野巽 1985 『牧野巽著作集』 第5巻 御茶の水書房  
瀬川昌久 1996 『族譜』 風響社  
黄義仁 1999 『布依族史』 貴州民族出版

【中国、パイ族、移住伝説、族譜、葬送儀礼】